

[総合的な学習の時間]

外国人に対する差別を自分事として捉え、 差別と向き合う児童の育成

－継続した韓国の小学生との交流活動を通して－

藤井 美香*

1 はじめに

近年、グローバル化の進展に伴い、児童が外国人とのかかわる機会が増えている。しかしながら、日本において外国人に対する差別は深刻である。平成28年6月には外国人の人権に関する法律として、「本邦外出身者に対する不当な差別的言動の解消に向けた取組の推進に関する法律」が公布された。ヘイトスピーチ解消法とも呼ばれているこの法律の第6条には、「国は、本邦外出身者に対する不当な差別的言動を解消するための教育活動を実施するとともに、そのために必要な取組を行うものとする。」とあり、外国人に対する偏見や差別をなくすための教育活動が求められている。所属校では、外国人差別に関する同和学習を「社会参加学習」に位置付けている。社会参加学習では、「社会生活で発生している人権課題や差別事象を題材とし、他者の意見を傾聴し、痛みや苦しみに共感し、相手を考えた決断と行動ができる力を育む。」としている。しかし、外国人差別に対して、外国人とのかかわる機会が少ない児童が痛みや苦しみに共感することは難しく、自分事と捉えにくい。

名古屋(2021)は、「外国人」に対する人権課題を取り上げた授業において、児童に身近なものから外国につなげ、事前に調べ活動を行って出会いの期待感を高め、当事者から直接話を聞いて異文化体験をするという一連の流れの授業構成は、児童が初めは遠かった事象を自分事と捉え、かかわろうとすることに有効であると明らかにした。筆者は、これまでの外国人に対する偏見や差別を取り上げた同和学習の実践において、様々な外国の方と交流活動を取り入れてきた。マラウイの留学生との交流活動、中国の留学生による異言語体験授業など、児童が外国人とのかかわる機会を設けた。児童は日本と外国の共通点や相違点を見付けたり、外国から日本に来て、日本語が分からない中で生活するつらさ、不安、孤独感に気付いたりした。しかし、これらの異文化体験は、教師側の計画に基づいて行われることが多く、児童が主体的に考えてかかわる機会が少なかった。そのため、外国人に対する偏見や差別に対して、痛みや苦しみに共感する姿は見られたが、自分事として言動を振り返ることは難しかった。

また、文部科学省(2008)は、人権教育における体験的な活動について、ただ体験的な活動を取り入れればよいということではなく、工夫して取り入れることが必要であり、「児童が自らの行動を変容させる要因や、児童の内面における人権課題への自覚の深まりを意識した指導の構成が不可欠」と述べている。さらに、体験を通して「児童一人一人が活躍できるように配慮し、達成感を味わわせ、自立心を養うような工夫に努めることが求められる」とも述べている。児童が達成感を味わうためには、まず、児童自らが「したい」「やりたい」という願いを持っていることが大前提であり、その願いを實踐できる活動を仕組むことが重要である。その上で、つながった外国の仲間と継続して交流する中で、多様な考えに出会い、自分自身もつ外国人に対する偏見や差別と向き合う児童の姿を實現することができると考える。

そこで、本研究では、韓国の小学生とオンラインで交流活動を継続して行い、外国人に対する偏見や差別をなくすために自分ができることを考える同和学習の授業を計画、実践する。交流活動では、児童同士が自由に交流する時間を設定し、児童の主体的な交流活動を促す。また、交流活動後の同和学習では、韓国の小学生の外国人差別に対する思いを共有し、児童が外国人に対する偏見や差別を自分事として捉え、これまでの自分を振り返る姿を目指す。

2 研究の目的

外国人差別に関する同和学習の授業において、外国人に対する偏見や差別を自分事として捉え、自分を振り返り、差別と向き合う児童を育成するために、韓国の小学生との継続した交流活動を取り入れた教材開発と単元開発を行う。実践において見られた児童の姿から、手立ての有効性と課題を明らかにする。

*上越市立東本町小学校

3 研究の方法

(1) 実践の対象

- ① 実践期間：令和6年7月～11月
- ② 対象児童：新潟県公立小学校 第4学年 34名
- ③ 抽出児童：対象児童のうち、3名を抽出児童とする。
 A児：メディア等の情報から、韓国に対してネガティブなイメージをもっている児童。
 B児：自分の思いや考えを友達に話すことはほとんどないが、韓国語を自主的に学習している児童。
 C児：自分の思いや考えを意欲的に伝えることができるが、言語の違いをととても不安に感じている児童。

(2) 検証の方法

① 韓国の小学生との交流活動における児童の言動、振り返りの記述から、児童同士のかかわり方の変容を考察
 韓国の小学生とオンラインで3回交流活動を行う。抽出児童3名の交流活動時の言動と振り返り作文の記述から、変容を考察する。また、対象児童34名の振り返りの記述をKH Coderを用いてテキストマイニング分析をし、学級全体の思考の変容について考察する。

② 同和学習「外国人に対する偏見や差別をなくすために」における児童の発言、振り返りの記述を考察

3回の交流活動後、外国人差別に関する同和学習を行う。抽出児童3名の韓国の小学生との交流活動に関連する発言や振り返り記述から、外国人差別を自分事として捉えているか、これまでの自分を振り返り、外国人に対する差別や偏見をなくすために自分ができることを考えているかについて考察する。

4 研究の実際

(1) 韓国の小学生との継続したオンライン交流活動

韓国の小学校第3学年（20名）とのオンライン交流活動を3回実施した。交流活動では、授業の流れを全体で確認した後、グループごとに活動した。交流グループは、継続して同じ児童とかわることができるようにした。グループごとの活動の際、児童の主体的な交流を促すための手立てとして、自由交流の時間を毎回10分程度確保した。また、交流活動の内容は、1回目の活動については教師同士の対話により決定したが、その後は児童と「韓国の小学生とどんな交流活動がしたいか」を話し合っ決定した。以下に3回の交流活動の内容を示す。

表1 【韓国の小学生とのオンライン交流活動の内容】

日時	活動内容
1回目	【自己紹介】 ・名前、好きなことや物、苦手なことや物を英語で紹介をする。
2回目	【学校紹介】 ・学校の中で紹介したい場所や物の写真を撮影する。その写真を画面共有しながら、簡単な英語を用いて紹介する。
3回目	【学校クイズ大会】 ・各学校で、学校に関するクイズを10問つくる。3択クイズか○×クイズにして、互いに学校クイズを出し合う。



写真1 【オンライン交流の様子】

(2) 目指す子どもの姿を具現するための手立て

児童が韓国の小学生との交流体験から、外国人差別を自分事として考え、これまでの自分を振り返り、差別と向き合うために以下の2つの手立てを講じた。

① 自由交流の時間の設定

児童の主体的な交流を促すため、自由交流の時間を毎回10分程度確保する。井上（2020）は、人権感覚の育成を行う上で、「体験的な学習」は、単なる体験ではなく、本質的な理解への自覚の深まりを意識した構成が不可欠であり、「体験」だけでなく、「振り返り」や「一般化」、「応用」との関連をもたせることが重要であると明らかにした。そこで、交流後に振り返りを書き、学級で共有する。その際、韓国の小学生の振り返りも共有する。そして、次の交流活動につなげていくというサイクルを繰り返す中で、児童の達成感を高め、外国人に対する自身の偏見と向き合うことができるようにする。

② 同和学習の授業において韓国の小学生が考えている外国人差別に対する思いの共有

韓国の小学生との交流活動を通して、児童にとって韓国に住んでいる方々が身近になると考える。そこで、交流校の教師（2名）が「日本を訪問したときに受けた差別事象」を同和学習の中で取り上げる。

また、交流校の第6学年は、日本の小学生との交流経験がある。交流校の第6学年で外国人差別について考える授業を実践したのを受け、同和学習の授業において、対象児童が外国人差別に対する多様な考えに出会う機会をつくるため、韓国の小学生の外国人差別に対する思いの一部を共有する。韓国の小学生のハングル文字の記述は、翻訳アプリ（Papago）を用いて翻訳し児童に提示する。提示する記述の一部を以下に示す。

表2 【韓国の小学校第6学年の外国人差別に対する思い】

- ・日本の小学生との交流を通して、日本の学生も私たちと同じで、住んでいる所と言葉が違うだけだと分かった。差別せず、同じ人間として接していきたい。
- ・日本人の学生と交流をして、好きなことが同じ友達がいて良かった。互いの文化を尊重して、困っていることを分かっていたい。
- ・違うことがあっても理解して、互いを知り合いながら過ごしたい。日本について知って、日本人も私たちについて知っていれば、良い仲になれると思う。
- ・オンラインで顔を見て、笑いながら話したら、本当に友達になれた気がした。温かく接し、良いところと一緒に楽しむことができる人になりたい。
- ・正直、日本人に対して少し嫌なイメージがあった。でも日本人にも良い人はたくさんいる。互いに知り合わなければいけないと思った。

5 授業の実際と考察

(1) A児の変容の考察

A児は、以前から韓国について「怖い」と話していた。メディア等で聞いた情報から「韓国」という国に対して良いイメージをもっていなかった。A児の交流活動後の振り返り記述を以下に示す。なお、抽出児童3名の振り返り記述でひらがな表記の部分は、筆者が漢字に変換している。また、「〇〇さん」には、交流した韓国の小学生の名前が記述されていた。

表3 【A児の活動後の振り返り記述】

	A児の振り返り記述
1回目	最初は少し分からなくて悲しかったけど、最後にはマスター？できてうれしかった。またいつか、交流した人と会って、アニョハセヨと言いたいです。でもその時はもっともっとたくさん韓国語を覚えていきたいです。
2回目	とても楽しい授業になりました。僕たちの名前を分かってくれてとてもうれしかったです。あのポスターとっても分かりやすくよかったです。学校クイズ大会も一緒にやってくれるのもうれしいです。また学校のクイズ大会で、〇〇さん、〇〇さん、〇〇さんと会いたいです。
3回目	今日とても楽しいクイズ大会でした。キムチがとても美味しそうで、アイパッドにかじりつきそうになりました。名前も呼んでくれてうれしかったです。今度できたら、またクイズ大会をして、今度こそ全問正解したいです。あと、一緒にオンラインで遊びたいです。

A児は、1回目の交流活動で自己紹介を進んで行っていたが、言語の違いから、自分が伝えたいことがうまく伝わらないと感じていた。そのため、韓国語を学び、もっとコミュニケーションが取りたいと考えていることが分かる。2回目の交流活動では、「名前を呼びたい」と韓国の小学生の名前をワークシートの空いているところに書き、熱心に覚えていた。互いに名前呼び合い、「名前を呼んでくれた」と喜んでいて、交流活動でうれしかったことを具体的に記述していることから、交流活動を楽しんでいることが分かる。3回目の記述には、交流活動で印象に残ったことを具体的に書いている。「これから一緒にしたいこと」の記述も出てきた。「外国人」としてではなく、「その人」としてかかわっていると考えられる。

3回の交流活動後の同和学習では、「日本に対して嫌なイメージがあった」という韓国の小学生の考えを聞いた瞬間、「あー。分かる。韓国に嫌なイメージがあった。」とつぶやいた。「交流する前は、なんか怖い国だと思っていた。でも、かかわったらなんか違った。」と話した。以下は、A児の同和学習の振り返り記述である。

ぼくは嫌いな国があります。でも、この授業から本当なのかなと思いました。今度から、ちゃんとした情報を知ってから人に言おうと思います。

A児は、これまでの自分を振り返り、勝手なイメージで決め付けている自分や「知らない」ことが差別につながっていることに気付いた。さらに、国のイメージが「その国の人」ではないことを知ったと考えられる。

(2) 抽出児童B児の変容と考察

B児は、交流活動1回目以前の休み時間に「韓国語のあいうえお表がほしい」と言ってきた。その表を見て、毎日韓国語の勉強をしていた。授業中に自分から発言することはほとんどないが、韓国の小学生との交流では、自分で作った韓国語のあいうえお表を見せたり、質問をしたりする姿が見られた。B児の交流活動後の振り返り記述を以下に示す。

表4 【B児の活動後の振り返り記述】

B児の振り返り記述	
1回目	自己紹介が上手くできて良かったです。終わった後も、質問をしてみたり、〇〇を知っていますか?など、たくさん話せて良かったです。自己紹介をして、終わったら拍手をしてくれて、とてもうれしかったです。また、韓国の友達も発表が上手でした。画面ごしだから、少し聞こえづらかったけど、会話ができてうれしかったです。質問をしたら答えてくれました。うれしかったです。
2回目	今日、韓国の友達と交流しました。最初に私たちが場所や物を紹介しました。ちなみに私は、給食のことを紹介しました。私たちの紹介が終わると、韓国の友達も学校のことなどを紹介してくれました。質問をするため、翻訳を使ってアイパッドで表しました。けど、韓国の友達はあまり聞いていませんでした。でも、韓国の友達が紙で「どんな給食が出るんですか?」みたいな質問をしてきてくれました。そのとき、私が持っていた給食の写真を見せてあげました。韓国の友達から質問してくれてうれしかったです。韓国の友達とたくさん話せてよかったです。최고!楽しかったです。감사합니다~감사합니다~감사합니다~
3回目	今日、韓国の友達と交流しました。先に韓国の友達がクイズを出してくれました。韓国の友達は、学校の名前とか質問をしてくれました。クイズがお互いに終わると、韓国の友達が翻訳で、「好きな果物は何ですか?」や「給食って何ですか?」という質問があって、え?給食知らないのかな?と思って、給食の写真を見せてあげました。私たちがクイズを出した時、韓国の友達が「ワン」とか「ツー」とか「スリー」とか、指で表したり言葉で表したりしてくれてとてもうれしかったです。私たちも楽しかったし、韓国の友達も楽しかったかな?と思いました。また交流したいです。楽しかったです。감사합니다.

1回目は、自分がしたことやできたことの記述が多い。しかし、交流の回数を重ねるにつれて、韓国の小学生がしてくれたことや韓国の小学生とのやり取りについての記述が増えた。相手が自分たちのことを知ろうとしてくれたことに喜びを感じたり、互いに理解し合うためのコミュニケーションの取り方を学んだりしている様子が伺える。B児は、1回目の交流の際、韓国語の発音のあいうえお表でやり取りをしようとしていた。しかし、韓国語も英語と同じように日本語と言い方が違う単語があることに気づき、韓国語の単語の勉強も始めた。2回目以降の振り返り記述には、韓国語単語の記述も見られる。B児は、相手を知るためにはどうしたらよいかを考えて動いているだけでなく、この交流活動を通して韓国語を学びたいという、新たな関心を持った。

3回の交流活動後の同和学習でB児の発言はなかった。以下は、B児の同和学習の振り返り記述である。

外国人（韓国人）だからと言って、流行っているものが必ずできるというわけではないと思います。韓国の食事の時は、お皿を持たないけど、どこへ行っても、日本も韓国も他の国も、国が違うから文化や言葉、マナーなどの色々なことが違うのは当たり前だと思いました。日本人が外国に行っても、外国人が日本に行っても差別をしない、外国人も日本人を差別しないしてほしいと思いました。お互いの国のことを知ってほしいと思いました。

B児は交流活動を通して、言語や文化が違っていても楽しく交流できた、自分が韓国語を学ぶことでよりコミュニケーションが取りやすくなったという達成感があつた。国が違えば違っていることは当たり前であり、違っていることで差別することはおかしいと実感したからこそ、被差別者の気持ちに寄り添いながら考えていることが分かる。また、「お互いの国のことを知ってほしい」という記述は、互いにかかわって知り合えば楽しいと実感したからこそ、他の人たちにも「知ってほしい」と書いていると推察する。

(3) 抽出児童C児の変容と考察

C児は、1回目の交流活動前、韓国の小学生との言語の違いから、コミュニケーションが取れるか「不安」と話していた。自己紹介の紙を何度も書き直し、英語の練習を繰り返し行っていた。C児の交流活動後の振り返り記述を以下に示す。

表5 【C児の活動後の振り返り記述】

C児の振り返り記述	
1回目	最初はあまりお話が通じなかったけど最後はお話が通じたり、自分が描いたぬり絵を出すといういい反応をしてくれてうれしかった。最初は緊張したけど、何となく自己紹介ができていてよかった。みんな最初緊張していてそうだったけど、自己紹介をして仲が深まった。班の人も何となくなれてみんな楽しそうだった!!ぬり絵を見せたら「知ってるよ!」みたいな反応をくれてうれしかった。みんな笑顔でよかった!!ポケモンのぬり絵を出したらみんな反応をくれた。

めの方法を工夫して交流していたと推察できる。

2回目は、出現語彙が1回目よりも増えた。児童が様々な方法で交流をしていたことが分かる。また、「友達」の出現数が多く、「韓国」「友達」に共起が出現している。1回目の韓国の小学生の振り返りには「日本の友達」という記述が多く見られた。それを聞いた児童は「次からは友達って言おう。」と話した。児童の中で「韓国の小学生」から「韓国の友達」に変容していった。さらに、「名前」「呼ぶ」に共起が出現しており、名前を呼び合うことで、1回目よりも親しみをもって交流していたと考える。

3回目は、交流の仕方に関する記述よりも、学校クイズ大会という活動に関する記述が多く出現している。韓国の小学生との交流を楽しむことから、韓国の友達と一緒に活動を楽しむという関係性に変化していると考えられる。

継続した交流活動を通して、児童は、異文化への不安を感じながらも、楽しくコミュニケーションを取る方法を工夫する。工夫してできたことに達成感を感じ、さらに親しみをもってかかわりたいという意欲が高まる。そして、外国の人と自分という関係性を気にせず、友達や仲間のように活動自体を楽しんでいくことが分かった。

6 成果と課題

本実践研究における成果は以下の2点である。

まず、継続した韓国の小学生との交流活動は、外国人に対する偏見や差別を自分事として考える児童の姿につながった。交流活動の中でも、児童が主体的に考えてかかわる自由交流の時間の設定が有効であった。児童同士のかかわりの中で、自分と相手の共通点や相違点を知り合うことを楽しんでいった。そして、新しいことに出会うことや違っていることを楽しいと児童が自ら実感していったことで、差別をされた人の思いに共感し、差別に憤り、自分を振り返る姿につながった。教師の意図的な交流活動も必要であるが、児童の「したい」「やってみたい」を実現する交流活動を通して、児童の達成感が高まったことで、このような児童の姿が見られたと考える。

次に、同和学習において、交流していた韓国の小学生の外国人差別に対する思いを共有したことは、児童が自分自身を振り返ることに有効であった。児童が「韓国の小学生も同じことを考えている」と実感し、これからの自分の行動を考えることにつながった。特に「日本人に対して少し嫌なイメージがあった」という韓国の小学生の思いを聞き、「自分もそうかもしれない」と交流をする前の自分を振り返る児童が多くいた。同和学習の振り返りには、「外国人差別はいけない」「外国人差別はしない」という表面上の言葉だけでなく、「これまでの自分」「交流を通して考えたこと」の記述が多く見られた。同年代の韓国の小学生の言葉は、児童が自分自身を見つめる姿につながったと考える。

本実践研究における課題は以下の2点である。

同和学習において、韓国の小学生の考えを聞いた後、児童が「差別していた自分」「差別していたかもしれない自分」を語る時間を十分に確保する必要がある。これまでの交流活動から、国籍や言語が違っていても互いに知り合うことができる、かかわることが楽しいと実感していた児童は、国に対するイメージが「その国の人」ではないことに気付いていた。その思いを共有する時間をつくることで、自分を振り返るだけでなく、自分の差別心と向き合うことができたと考えられる。

また、本実践における韓国の小学生との交流活動は、オンラインでの交流であった。直接会っての交流活動とは違いがある。しかし、外国の小学生と直接会って複数回交流することは難しい。今後は、オンライン交流のメリットとデメリットをしっかりと理解した上で、交流活動を計画、実施することが重要である。どこの国とでもつながることができるオンラインの良さを生かした交流活動の実践は、児童の視野を広げ、外国人に対する偏見や差別をなくすための一助になると考える。

【引用・参考文献】

井上菜穂 (2020) 「体験的な学習を踏まえた人権感覚の育成－『主権者意識を高める教育の充実のための出前授業』を事例に－」 鳴門教育大学研究紀要第35巻, 鳴門教育大学, pp81-92

上越市立東本町小学校 (2024) 『愛・いのち 第5集』

名古屋康秀 (2021) 「自分を見つめ直し、自らの偏見に気付く子どもの育成～出会いと振り返りに焦点を当てた4年生の人権教育の実践から～」 教育実践研究第31集, 上越教育大学学校教育実践研究センター, pp241-246

文部科学省 (2008) 『人権教育の指導方法等の在り方について (第3次とりまとめ)』,

https://www.mext.go.jp/content/20250619-mxt_jidou01-100114680_000.pdf (URLの最終閲覧日2025年8月20日)